共通テーマ「幕末期対外情報接受の諸相」

# 蕃書調所初代頭取・古賀謹一郎と新聞

山口順子（オノーレ情報文化研究所)
https://onore.info
onoreinfo@gmail.com
NPO法人インテリジェンス研究所
第63回諜報研究会(2024年12月14日)

構成[1]

1　古賀謹一郎について
2　謹一郎の読書と情報環境
3　謹一郎の上書や提案
4　蕃書調所の「新聞」発行
5　まとめ

---

## ＜はじめに～自己紹介と過去の研究＞

・明治期滑稽諷刺雑誌研究から19世紀メディア史研究とともに時代を遡上。
・「ヴァンリードの新聞『もしほ草』官許をめぐって−書誌データと史料による考証」『メディア史研究』18号、ゆまに書房、2005年
・「明治前期『滑稽諷刺新聞雑誌』のエポック」山本武利監修『叢書・現代のメディアとジャーナリズム第5巻 新聞・雑誌・出版』ミネルヴァ書房、2005年11月

・2009年以降「戊辰戦争期木版刊行物研究会」boshinjls.netにおいて、『太政官日誌』など官版日誌類共同研究、全国的な異版や史料調査に参加（国文学研究資料館・総合研究大学院大学藤實久美子教授代表の科研：第1期～第3期まで、2010年～2023年）研究会は継続中。
・「『太政官日誌』京都版の発刊－史料による実態の考察」『出版研究』42号、2011年3月
・「民間木版新聞群とその情報環境」箱石大編著『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、2013年）所収
・「官版日誌類の刊行−戊辰戦争期の禁裏御所受領記録を元にした考察」2019年5月[2]
・第2次日誌フルで『太政官日誌』等フルテキストデータベース公開（2023年11月）nisshifull.boshinjls.net

・洋学史学会監修『洋学史研究事典』（思文閣出版、2021年）の＜新聞＞項目執筆～古賀謹一郎の功績に着目。
・2022年5月から山川菊栄記念会世話人として神奈川県立図書館蔵山川菊栄文庫資料の整理に加わり、山川菊栄の祖父・水戸藩儒青山延寿史料を主に担当し全体の資料構造を作成した。（近著『山川菊栄文庫資料』（神奈川県立図書館蔵）のうち青山延寿出版関係史料概要について　付：補論「『覚書　幕末の水戸藩』への道程」）[3]青山延寿が受領した書簡には古賀謹一郎発のものがあり、裏打ちされた丁寧な保管状態を確認している。

---

[1] 山口順子「蕃書調所初代頭取・古賀謹一郎と新聞」（発表資料改訂版241219）This work © 2024 is licensed under Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International。発表当日の配布資料を補訂し、投影画像から若干数を挿入した。
以下、発表に際して引用した史料の用字は旧字を適宜現用に変えている。本文中の暦年月日については、太陽暦採用以前は太陰暦表示を先に表示している。「新聞」はつぎを総合的に含んでいる：いわゆるニュースの字義、今日の雑誌を含む逐次刊行物に対する普通名詞「新聞紙」、蕃書調所での各種新聞を翻訳筆記した稿本、同所での官板刊行物。
[2] 科研基盤研究B・15H03246「官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域に関する学際的研究」サイトhttps://sites.google.com/view/kanpannisshi/ 内
[3] 科研基盤研究B・20H01319「維新政権期の木版刊行物に関する学際的研究およびオープンサイエンスの推進」サイトhttps://sites.google.com/view/ishin-mokuhan/top/report2内

# 1　古賀謹一郎について

## （1）基本文献と最近の研究抄録

＜古賀謹一郎＞
吉田賢輔述「茶渓古賀先生行略」『江戸』35号,1918年12月[4]
志良以静子「古賀茶渓」（文学遺跡巡礼英学篇43）『学苑』第10巻9号、1943年、pp.46-59[5]
室賀信夫・矢守一彦編訳『蕃談』解説,平凡社東洋文庫,1965年
小野寺龍太『古賀謹一郎:万民の為、有益の芸事御開』、ミネルヴァ書房、2006年
眞壁仁『徳川後期の学問と政治　昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』、名古屋大学出版会、2007年
＜蕃書調所関連＞
文部省蔵版『日本教育史資料』第7巻、1892年
倉沢剛『幕末教育史の研究』吉川弘文館、1983年
原平三『幕末洋学史の研究』新人物往来社、1992年、小見壽発行・復刻版、2001年
宮地正人「混沌の中の開成所」『東京大学創立百二十周年記念東京大学展　学問の過去・現在・未来・第一部学問のアルケオロジー』東京大学出版会、1997年、デジタル版[6]

## （2）古賀家三代について[7]

・祖父精里（せいり、1750-1817）は、柴野栗山（しばのりつざん）尾藤二洲（びとうじしゅう）とともに寛政の三博士と称された。父侗庵、謹一郎と三代続く昌平坂学問所の儒者である。佐賀藩藩儒から、昌平坂学問所に召されて上京。林家と並ぶ二派を築く。古賀家は儒学とともに漢訳の洋学を通じた博覧強記で外界への視野が広く開けていた。対馬で朝鮮通信使節への漢文国書素案作成や対ロシアへの応答文書案、異国船漂着の際の漢文教諭書作成を行った。変革的思考をもって幕府の政治改革に進言しながら国難に対処していった。

・父侗庵（とうあん、1788-1847）は、天保年間に『海防憶測』を著して開国論を説いた。中国の華夷主張秩序観を閉鎖的と退け、外国交際の親善と見聞を広め情報獲得を主張し、アヘン戦争後は、植民地化をもたらしている弱肉強食の世界情勢に思考を深めていく。弘化年間のオランダ国書返書草案や琉球・フランス間の漢文往復書簡の和訳を担当。自己利益本位の追求をゆるす交易のみでは、国内政治も国際政治も秩序が保持できないという認識のもと、日本の課題は交易を通じた武備の向上と考えていた。精里から継承した蔵書に自著、収集本を含む「万余巻楼蔵書目録」は遺族が宮内省に献納した時点で15,000点以上[8]。

・三代目の謹一郎（増[9]、謹堂、隠居後は茶渓、1816～1884）は父の開国論と外界視野を広げる情報収集姿勢を継承しつつ、ペリー来航後の老中阿部正弘の諮問に応じた上書「存念書」を提

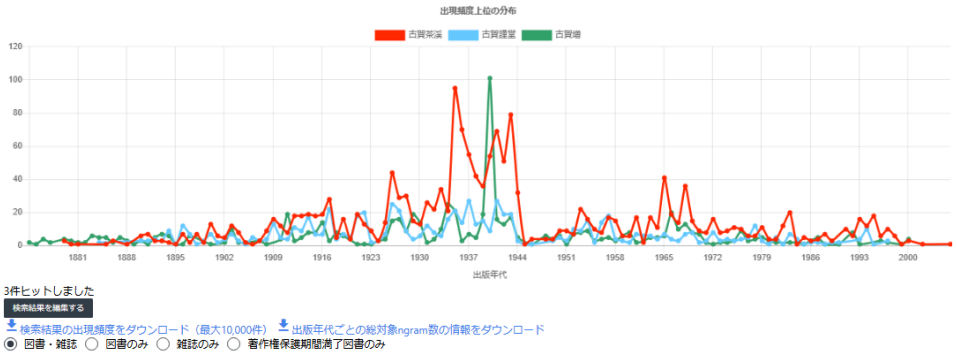
---

[4] 『江戸』9(3)(35),江戸旧事采訪会,1918-12.pp.93-95, NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1468462 (参照2024-11-29)
[5] 発表者は未見。
[6] https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/Publish_db/1997Archaeology/01/10300.html
[7] この節の説明は 眞壁仁『徳川後期の学問と政治　昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』（名古屋大学出版会、2007年）に依拠している。
[8] 現在宮内庁書陵部デジタルアーカイブ横断検索では「古賀本」として表示される。
[9] 国書データベースでは「マサル」と読む。眞壁氏は慶應大学所蔵の古賀家史料にある「ミツル」と「ミノル」の二つのフリガナを見ているという。ここでは国書データベースに従う。

出。嘉永年間ロシア使節の応接掛として条約漢文作成を担当。洋学に関する政策提言を行い、ついに洋学所（のち蕃書調所）の設立を実現させ初代頭取に就任し、その基礎を築いた。

## (３)古賀謹一郎について

・明治以降現代までの出版に表れる古賀の軌跡




| キーワード | 総出現頻度 | URLリンク |
|---|---|---|
| 古賀茶渓 | 1723 | 国立国会図書館デジタルコレクションで検索 |
| 古賀謹堂 | 754 | 国立国会図書館デジタルコレクションで検索 |
| 古賀増 | 725 | 国立国会図書館デジタルコレクションで検索 |

国立国会図書館次世代デジタルライブラリ・Ngramviewer「古賀謹堂/古賀茶渓/古賀謹一郎/ 古賀増」を入力した結果　https://lab.ndl.go.jp/service/ngramviewer/
古賀謹一郎0、古賀茶渓1723、古賀謹堂754、古賀増725

少ない理由：安政元年から2年にかけて、下田でプチャーチンロシア使節の応接掛として外交交渉のため滞在中、伊豆沖地震の津波に被災し、写本や著作稿本など200巻余を失う。そのため自著刊行が困難になったか。また、維新後公職を固辞したためか。

・著作・稿本
国文学研究資料館国書データベースでは16件。次は検索結果（2024年12月４日現在）を利用して加筆したもの。＊印は活字化されている書籍やデジタル版。

「蕃談」，（漂流記），次郎吉述、憂天生（古賀謹一郎）編，
＊国立公文書館デジタルアーカイブ内
＊室賀信夫、矢守一彦編『蕃談』（東洋文庫83、平凡社、1965年）

「謹堂日誌鈔之一」，（以下、「謹日誌」と略す）
＊慶應大学図書館蔵[10]、国文学研究資料館国書データベース内デジタル版

[10] 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・浜野文庫（ハ\09-4-68-1）浜野四三郎の写本1冊（弘化４年～安政３年）,国書データベース内 https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100437697/, 以下引用には（謹日誌）と略す。

「西使日記」（長崎でのロシア国使節応接時の日記）
「西使続記」（下田でのロシア国使節応接日記）
＊いずれも東京大学史料編纂所 編『大日本古文書』幕末外国関係文書 附録之一,東京大学,大正2. 国立国会図書館デジタルコレクション（以下NDL・DCと表記を略す）内

「度日閑言」（たくじつかんげん）
＊古賀茶渓「度日閑言」、国立国会図書館貴重書、NDL・DC内

その他
巵言日出（随筆），書笏（本草）、蕈説（植物）、綏夷図巻序跋、西使同解，先考侗菴君行述，跋先府君書帖後、百笑百妙，勇蹟紀事，流蕃通書（漂流記）、古賀茶渓七絶詩（漢詩）

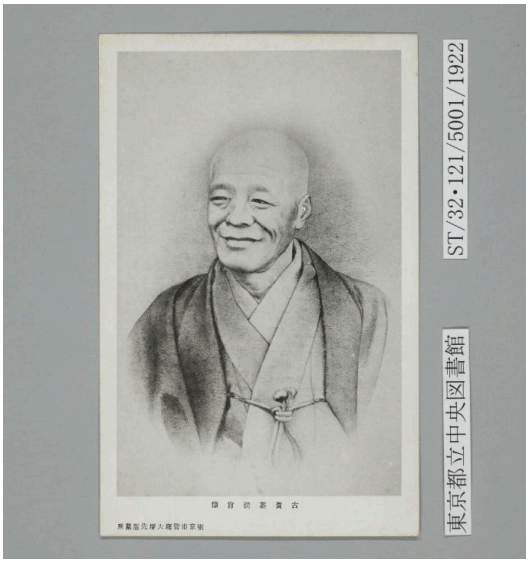
・宮内庁書陵部蔵本
明治22年（1889）遺族から蔵書が献納された15,000点はデータベースでは「古賀本」として表示される（古賀侗庵自筆本48件・漢籍を含む1743件、うち、古賀増・写本、校訂などとして、漂話（漂流者からの聞き書き　7件：万次郎漂話を含む）和蘭宝函（抄訳）2点

・「大塚先儒墓所」[11]（文京区）
室鳩巣を儒式で埋葬後、名だたる儒者が墓所としていたが、古賀精里を葬ったのち、侗庵が幕府に申請して儒者の墓所と定められた。古賀家の一族が眠る。
明治期にはすでに荒廃しており、「儒者捨て場」との俗称もあった。外山正一らが保存に乗り出し、浜尾新がそれを継承して「大塚先儒墓所保存会」を設立して保存運動を開始。下賜金をもとに東京市へ請願、維持費等を寄付した。1921（大正10）年3月に国指定史蹟となる。現在は東京都が施錠管理を付近の吹上稲荷神社に委託している。

大塚先儒墓所内の古賀家の墓（2024年10月31日山口順子撮影）

[11] 『大塚先儒墓所保存會報告書』,[大塚先儒墓所保存會],[1917]. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1919282 (参照 2024-11-23)、東京市小石川区 編『小石川区史』,東京市小石川区,昭10. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1219191 (参照 2024-10-23)、中村薫 著『神田文化史』,神田史蹟研究会,昭和10. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1232538 (参照 2024-10-25)三代の肖像と墓所の紹介を掲載。

・古賀謹一郎肖像　東京市作成絵葉書[12]「大塚先儒墓所」（1922・大正11年ころ）内




東京市は史蹟指定を記念して古賀三代の肖像を含む絵葉書を作成。それが『神田文化史』に転載され通例はそれを複写利用されている。写真近影をもとに肖像画にしたもの。髷を切った、1871（明治4）年以降撮影か。

## 2　謹一郎の読書と情報環境

開国以前の対外情報収集手段は限定的だが父の蔵書をもとにしてさらに広範囲から情報取得していた。

①（偶発的な）漂流民、渡来者からの聞き書き

・嘉永元年、漂流民次郎吉からの聞き書きを行う「漂談会」を主宰。「新聞如山」と日記に書く（謹日誌、2月14日条）。嘉永2年「蕃談」（彩色絵入）を編著[13]。

「万巻の書を読み、万里の路を行くことは私の大きな宿願であった」（序文より）

「焚を掬い溺を救うは仁人の事なるに、待つに仇讐を以てす、亦悲しむべし」（次郎吉の言に、ロシア人が遠路護送してくれたのは親切な厚意に出たようである。しかるにわが守護兵は善悪の区別もなく、ただ侵略者として敵視する。無実の罪も甚しい、と。しかもこれは、今度一度だけの失策ではないのである。（「聞話詩」末尾より）

（野蛮な死刑方法をとる日本人を鬼だという外国からの批判に対して）「大砲を一発うてば、多くの兵士はみなごろしになる。そういうことをしながら、仁とか不仁とかいうのは、おかしな話だ」（東洋文庫本頭注、p175）

②外国の地理書や地図

・コーランツトルコ地誌ほか

③（原則年単位作成）和蘭風説書、別段風説書、（唐船が到来したとき作成）唐風説書

・オランダ風説書はオランダ商館側から原則として口頭での伝達情報を長崎奉行通詞と相談の上、項目を取捨選択したうえで通詞が和文文書にして作られていた[14]。1840年以降長崎で作成されたオランダ語原文と同時に和訳文書が成立。のち天文台蛮書和解御用でも和訳。

---

[12] 東京都中央図書館・請求番号（ST/33・121/5001/1922)、同館のデジタルアーカイブ内公開画像（ジャパンサーチ経由で2024年11月20日確認）

[13] 以下の摘出引用ページは『蕃談』東洋文庫。

[14] 和蘭風説書及び別段風説書の説明は、松方冬子『オランダ風説書と近世日本』東京大学出版会、2007年を参照。

・別段風説書は1840年にバタフィア政庁がアヘン戦争関係記事を広東やシンガポールの英字新聞から集めて作成し、幕府に直接送るようにした文書。

④中国語新聞
・本格的な中国語の定期刊行新聞が香港で発刊開始。これにより翻訳の必要なく解読可能な時事情報の収集ができるようになった。『遐邇貫珍』(月刊、1853～1856)『六合叢談』(上海墨海書館、月2回のち月刊、1857～1858)『香港船頭貨價紙』や寧波の『中外新報』(半月刊のち月刊、1854～1861年)～『六合叢談』以下は蕃書調所(洋書調所)で翻刻発行。
第2次アヘン戦争や太平天国の乱の報道、19世紀の自然科学知識など、漢籍として翻訳の必要がない情報流布の速度と啓発力は洋書をしのぐものがあった。

⑤舶載された外国語新聞　バタフィアのオランダ総督府機関誌Javasche Courant(ジャワ新聞またはバタヒア新聞と称された)及びそのほかの逐次刊行物

⑥蘭書からの翻訳
・天文台がとりくんでいた百科辞書『ショメール』から雑誌『マガゼイン』への転換を謹一郎が自認し翻訳グループを統括(「月刊志林」)～蕃書調所の『玉石史林』刊行。稿本「度日閑言」

## (1) 父の蔵書「万余巻楼蔵書目録」[15]

・「コーランツトルコ地誌」
「コーランツトルコ」(「クーランテントルコ」)
原タイトル:De nieuwe, vermeerderde en verbeterde kouranten-tolk, of, Zakelyk, historisch- en staatkundig woordenboek
地理学者ヨハン・ヒュブネル著の原典ドイツ語からオランダ語に翻訳された百科事典。初版は『現代国家・新聞・会話百科事典』と『自然・技芸・職人・行為に関する好奇な百科事典』上下2巻で構成された。第12版(1732年、1734年)上下本と、下記の増補改訂版(1748年)について、日本で主として流通したのは1748年版だった。山村才助『訂正増訳采覧異言』(1802年)は、新井白石の原著を改訂するためにこの百科事典を「万国伝信記事」として参照した[16]。

・父侗庵の編著
古賀侗庵編著「俄羅斯紀聞」(おろしゃきぶん、文化6－弘化3、1809－1846)
　山村前掲を含む外国情勢について長年にわたり編纂したもの。同様に「俄羅斯情形臆度」(おろしゃじょうけいおくたく、文化11-弘化3、1814以前－1846)。
古賀侗庵編著「英夷新聞抄訳」[17](天保11-弘化2、和蘭風説書、唐風説書、琉球とフランスの漢文往復書簡、鴉片醸変記(侗庵著)、漂流民記事など)

---

[15] 古賀侗庵著作、定本類は「万余巻楼蔵書目録」と謹一郎収集蔵書のうち読書歴のある書籍資料(眞壁、2007、pp.228－229、p413の表9－1)を参照。そこからさらに「新聞」に関連した主要書を抽出した。「万余巻楼蔵書目録」の番外には新聞(31本)が入っているとのこと(眞壁同前、p44)。
[16] 以上、阿曽歩『洋学史研究事典』p144より要約。ただし、ヒュブネルは序文を書いているが、実際の著者はフォン・シュッツとバルタザールが主著者と今日では判明している(internet.archiveより)。国立国会図書館サイトでは『新増補改訂　職業・歴史・政治に関する新聞・会話百科事典』
[17] 「英夷新聞抄訳」の概要は(眞壁、p302、表6－2)による。

## （２）謹一郎の読書、情報収集

・アヘン戦争後の清国地理書
魏源 撰「聖武記」（せいぶき）（1844年）巻6：俄羅斯附記　附録澳門月報（マカオげっぽう）[18]
魏源、林則徐編「海国図志」（かいこくずし）（1842年）
宮内庁書陵部蔵の古賀本8冊は、道光版復刻，嘉永7年・安政2年・3年の 須原屋伊八版で籌海篇（魏源著）、英吉利・俄羅斯・普露社（林訳）である。川路聖謨が塩谷世弘と箕作阮甫に命じて和刻させた版。 和刻版が多種出版された。
「海国図志」が示す重要な国防策の一つが情報収集行為であった。林則徐編「海国図志墨利加州部」「夷情備采一、二」（いじょうびさい）にはシンガポールや広東の英字新聞をまとめた『澳門新聞紙』抄録「澳門月報」が示されている。

・和蘭風説、荷蘭密報（嘉永２，３年）
荷蘭密報は「別段風説書」のこと[19]
・嘉永2年正月４日に前々未年の和蘭密報を写している（謹日誌）。
＜参考＞
嘉永３（1850）年「別段風説書」阿部正弘旧蔵、司天台（天文台）訳（神奈川県立博物館蔵）[20]
　概要：広東でのイギリス人の自由歩行が許可されないことをきっかけにイギリスの大総督兼香港奉行が上海へ向け出立など、イギリスの東インド・シナ海配備の総軍艦数、艦名・鑑長名、アメリカとオランダの海軍勢力、ポルトガル総督による植民化の動静、ヨーロッパの騒擾の継続：フランス1848年革命、1849年のリヨンの反乱、英領インドと英国内商人が中国日本等での交易を希望しイギリス総督に一書があげ、政府はこれについて熟慮している。プロイセンによる国内統一の情勢、イタリア内各領地の騒乱、アメリカのゴールドラッシュなどを伝える。

> 「合衆國の北亜墨利加國人は、全世界に航海して弘く交易を為すことを勤る内、近日、風聞に据れは、日本にも到りて、交易を為すの所存ありと云へり」[21]

・中国語新聞『遐邇貫珍』
安政元年（1854）謹一郎は下田でのプチャーチン交渉に応接係として外交文書の漢訳に携わった。その滞在中、ロシア使節の随員ゴシケヴィッチの隠し持つ『遐邇貫珍』を察知し筆写させている。（「西使続記」[22]）

---

[18] 「附録澳門月報道光二十年七月　澳門にて印度五月十四日の來信(則中国四月十三日)に接せり鄂羅斯が印度を攻打せんと欲するの事に論及せり、蓋我英國の印度兵は（略）」（魏源 著 ほか『聖武記』,生活社,昭和18. pp.308－310,NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1042418 (参照 2024-11-12)
[19] 鍋島家伝来の和蘭風説書と重なるところが多い。（松方、2007年、pp.234-235の表4）
[20] 嶋村元宏「史料紹介　阿部家旧蔵「別段風説書」について－ペリー来港前夜の世界情勢」『神奈川県立博物館研究報告－人文科学ー』（第21号、1995年3月）
https://ch.kanagawa-museum.jp/uploads/kpmrr/kpmrr021_1995_shimamura.pdf [2024年11月14日]
[21] 嶋村同前、史料翻刻、p33
[22] 東京大学史料編纂所 編『大日本古文書』幕末外国関係文書 附録之一,東京大学,大正2. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/3451256 (参照 2024-11-08)

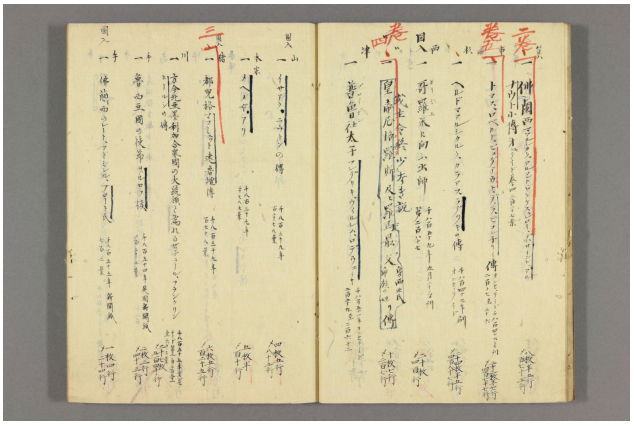
## （3）蘭書翻訳対象の転換～百科事典『ショメール』から雑誌『マガゼイン』そして新聞へ

・『ショメール日用百科事典』はフランスで1709年初版、1743年にオランダ語訳版が出た産業革命前の百科事典。
1778年7冊本を天文方蛮書和解御用13名で翻訳し、文化8年（1811年）から弘化2年（1845）まで35年続き100冊の「厚生新編」として幕府に献納したのち秘匿されていた[23]。『ショメール』から『マガゼイン』への翻訳対象の転換は上野晶子氏がすでに指摘している。
　ここでは、さらに「新聞」記事へと翻訳対象が拡大していたことを早稲田大学図書館蔵の「月刊志林」によって示す。

・古賀謹一郎は『ショメール』の内容の古さを指摘し、雑誌『マザゼイン』へと翻訳対象の転換を意識していた。
弘化4年9月29日『ショメール』を携えて来訪した五郎川（池田）才八が摘誦を求めたところ、古すぎて用をなさないからやめておこう。先人はなぜこの本を賞賛するか、と記す。（謹日誌）
嘉永元年3月29日に池田才八がマガゼイン壱本を示すと、古賀が訳そうと相談する。（謹日誌）

『マガゼイン』と当時称された『ネーデルランズマガジイン』（Nederlandsch magazijn）は英国の通俗絵入雑誌『ペニーマガジン』（Penny Magazine）のオランダ語訳編版。1834年にアムステルダムで創刊。週刊（または月刊）で世界各国の自然、事物の最新情報をすべての階級に向けて編集し安価に流布していった雑誌。豊富な挿絵入り[24]。

・古賀中心に翻訳グループが生まれ、蕃書調所の訳稿本「月刊志林」[25]につながっていった。
「月刊志林」早稲田大学図書館古典籍データベース（請求記号：イ02_05250）外題:[蕃所]調所教授方訳目 扉題:志林底稿目巳年之部[安政4(1857)]-申三月之部[万延元(1860)]
反町茂雄旧蔵



早稲田大学図書館古典籍総合データベース（請求記号：イ02_05250）

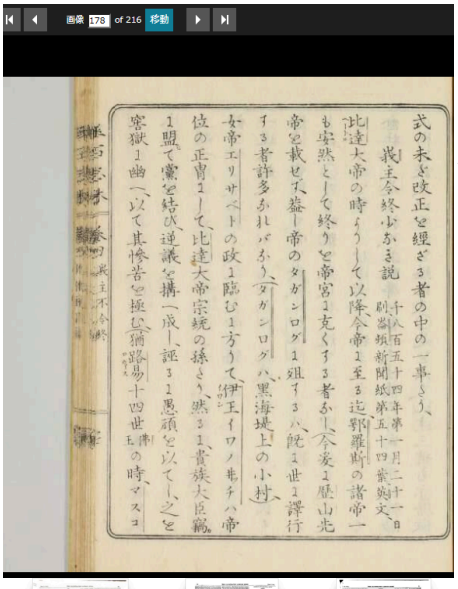
[23] 上野晶子「江戸幕府の編纂事業における『厚生新編』と蘭学の「公学」化」松方冬子編『日蘭関係をよみとく・上巻つなぐ人々』臨川書店、2015年、p249以下。上野執筆『洋学史研究事典』の項も参照。
[24] 書誌事項はErnest Claassen, “Het Nederlandsch Magazijn, het Nederlandsch Museum en De Honigbij. Driegeïllustreerde tijdschriften in de jaren dertig en veertig van de negentiende eeuw,” Jaarboek voorNederlandse boekgeschiedenis 5 , 1998, pp. 133-146.
[25] すでに知られている「月刊志林」は東京国立博物館蔵の『マガゼイン』1855年の挟み込み文書でページごとの担当者が書かれている「月刊志林用マカセイン分配記」というもの。この報告で参照する早稲田大学図書館蔵本は安政4年から6年までどの記事を訳したか個人名の頭文字で記されており、その典拠頁も書かれている。

・「マガゼイン」を共同翻訳する体制が安政4年までにできており、月ごとに担当者数名が交代で翻訳していく体制は安政5年（1858）年頭から。安政6年（1859）12月まで記録されている。

・朱と青の色文字で書き入れ文字は古賀のものとみられる。「巻一」といった頭注は『玉石志林』掲載記事と一致。青字は「有」としている。「度日閑言」記事と対応か。

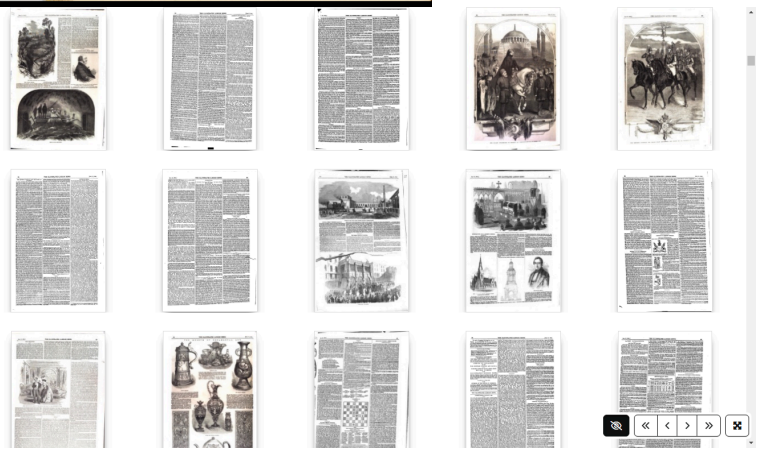
・もっとも古い翻訳対象の記事は1800年だが、1855年の掲載記事が40本と最も多い。安政4（1857）年までに入手できた『マガゼイン』から19世紀の現代的な情報を翻訳することができつつあったことがわかる。

・「月刊志林」は「マガゼイン」だけでなくほかのリソースからも訳していることが注目点。
「オンゼタイド」（Onze Tijd,オランダの文芸家協会編集。『マガゼイン』より専門的な雑誌）「ミュセイ」（Nederlandsch Museum、1836年創刊、『マガゼイン』より安価だが挿絵がずっと少なかった[26]）など。
「新聞」「新聞紙」「倫敦新聞」「英国新聞」の翻訳は安政5年12月から。英文翻訳のため手塚律蔵と西周と二人で13本を翻訳。




このなかの西周が担当した「峩主令終少なき説」は安政5（1858）年12月に訳され、『玉石志林』巻4（17丁オから26丁ウ）に掲載。リソースは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』（1854年1月21日、57頁）の記事「THE EMPEROR NICHOLAS, AND THE HOUSE OFROMANOFF」（ニコライ帝とロマノフ王朝）と判明した。[27]

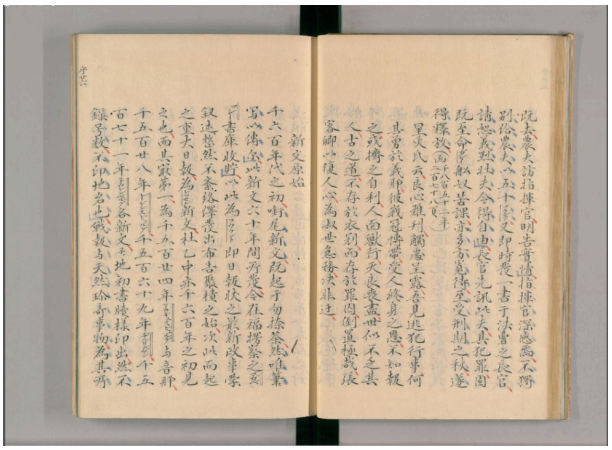
⇒『マガゼイン』から新聞翻訳への過渡期を示している。



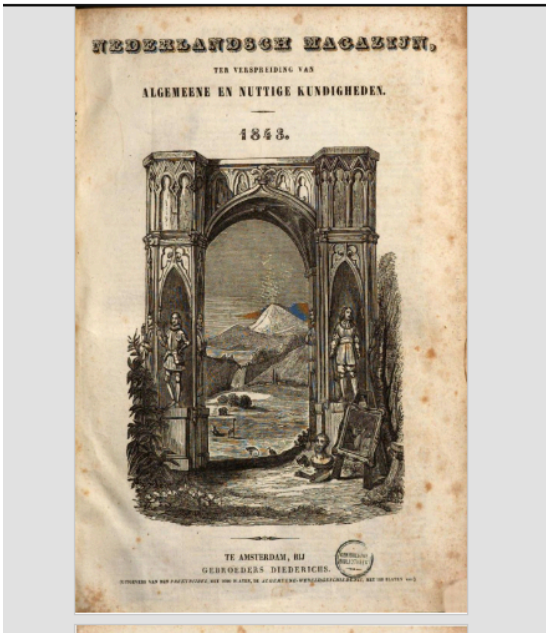
Hathitrast内ミシガン大学蔵ILN1854年1月21日号サムネイル部分より。2段目左端の頁の1.5段分が該当記事。1段目右端が記事関連の挿絵。

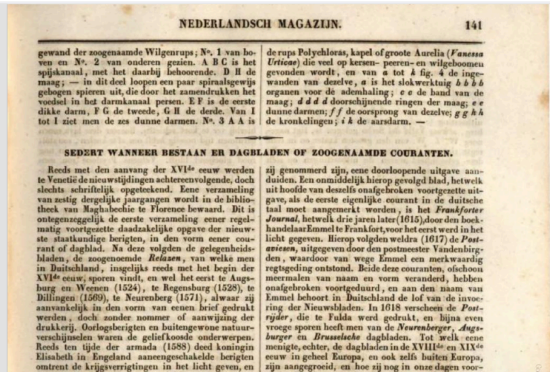
[26] 註24参照。
[27] Hathitrust内ミシガン大学所蔵本による。

・「マガゼイン」への謹一郎の愛着は、宮内庁書陵部蔵本（23巻、古賀本とされていないが古賀の手択本）と、訳稿「度日閑言」（国立国会図書館古典籍資料室蔵）に表れている。



・「度日閑言（たくじつかんげん）」[28]
国立国会図書館蔵。明治44年帝国図書館購求印。全25巻、15冊（冒頭に「閑言名辞解」を合綴）。
六巻の「新文原始」




グーグルブックス内オランダ国立図書館蔵本
1843年141頁、「新文始原」の原典

「度日閑言」は謹一郎が洋書調所を去った後「マガゼイン」から翻訳された約800項目の抄訳を編集し稿本としたもの。
これまで自序識語の慶應2年成立とされてきたが、この識語を読むとまだ完成途中であることがわかる。冒頭にある「閑言名辞解」（戊辰妙秋念二装釘）を合綴したとき、すなわち「慶應4年6月から8月」を考慮すると、慶應4年の前半までに成立と考える。

・宮内庁書陵部蔵の「マガゼイン」に多数ある付箋や書き込みは朱色と青色で書かれており、青字線引きあとが古賀の選択項目かと思われる。1835年1月のp18の欄外にあるJames Cook伝への青字書き込みには「度日、十一ノ二ヲ至四ヲ」とあり、「度日閑言十一」の「航海家コーク伝」の位

[28] ちなみに柳田泉は早稲田大学の最終講義に「度日閑言」をテーマとした。（柳田泉教授最終講義（昭和40年・1965年1月26日）古賀茶渓著『度日閑言』（大要））。国立国会図書館上野支部で徳川幕府旧蔵蘭学書籍が大量に発見され、そのなかの史料として柳田に示されたのを受けてのこと。

置と一致し、しかも「月刊志林」には表れない。ほかにも青字には「度日　云々」の文字があるので、青字は古賀の書入れで「度日」と対応した記事を示していることがわかる。「新文原始」項目にも青字線引きがあり、「度日閑言」六巻に「新文原始」項目の訳をつけている。これも「月刊志林」にはない。

・「度日閑言」巻6、「新文原始」（16丁オ～17丁ウ）
『マガゼイン』1843年141頁掲載記事を訳出。1600年代初めにベネチアで始まった新聞の起源から起筆し、17、18世紀のオランダの新聞小史を概説。

末尾の寸評偽名：飛耳氏の意　「度日閑言」冒頭「閑言名辞解」に「飛耳/--/長目」

「度日閑言」の各項目にコメントがつけられており、熟語や慣用句の一部から二字だけ抜いた偽名を使った人物の寸評がつけられている。その偽名の種明かしは「閑言名辞解」（戊辰妙秋念二装釘）に書かれている。これによると「飛耳」は「飛耳長目」、すなわち遠くのものをよく見ることのできる耳目、情報収集力があり物事に通じていることを表わしている。

> 飛耳氏云、人心厭旧好新、於是乎有新文之挙、唐/山雖有朝報塘報等、比之西土新文雑載全大地/各事、眇然小、彼人以是充開世之一助、導人以担/平易路令免大行九折々険、良計也、在本邦之大/起十一二局是而可

> 現代語訳（山口作成）飛耳氏が言うには、「人の心は古いものを嫌い、新しいものを好む傾向がある。それによって新聞が始まったのである。唐山（中国）には、朝報や塘報があるが、西洋の新聞が全大地の一切を掲載するのと比べると、規模が小さく、内容も限定的だ。西洋の人々はこれらの情報を用いて、世界の進歩を助け、世の中を平易にし、人々が険しい道に迷わないように導いている。これは素晴らしい計らいである。日本においても、大きく改革を進めるためには、これに倣って11か12の局（機関や事業）を立ち上げるのがよい。」と。

西洋の新聞による情報収集発信力や、その革新的な公共性を称賛し、日本でも新聞の発展を促すべきだという謹一郎の主張を「飛耳氏」に仮託して著わしたものと解釈できる。

「度日閑言」の題名は日常生活や人生の生き方に役立つような軽い教訓集を意味しており、凡例で原典は「和蘭宝函」と明示され、「マガゼイン」を訳編した著作といえる。本人の訳なのか不明とされてきたが、「謹日誌」で来訪者から蘭書を読んでほしいと言われ応じていること、「月刊史林」の実質的な翻訳統括者であることなどを合わせて考慮すると、蘭日翻訳ができたと考えている。

・成立年にもどると、慶應4年6月から8月（1868年8月から10月）なので、静岡転封前に「念二装釘」思いを込めて装丁したということになる。

そうすると、ここに書かれていた11，12局あることが望ましいという古賀の意見とおり、戊辰戦争下江戸で発行された『中外新聞』等木版新聞群の活況[29]を実見できたものの、6月の官許なき新聞

[29] 山口順子「民間木版新聞群とその情報環境」箱石大編著『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、2013年）

発行の禁止により一斉に姿を消し板木も没収され、昌平坂学問所も新政府の管理下に置かれたのち、複雑な想念とともに装丁作業をしたものと考えられる。

あくる明治2年（1869）年2月に初めて政府が新聞発行を公許し検閲は元・昌平坂学問所で行われるようになり、大学となった新組織に招聘された古賀謹一郎はそれを固辞し二度と官職につくことはなかった。

⇒謹一郎は、父から継承した万巻をもとに対外情勢を幅広く分析しながら、「マガゼイン」の翻訳作業を複数人で行い共有知をめざした。稿本「月刊志林」という名前にある「月刊」にはいずれ「マガゼイン」のような定期刊行物を出版したいという思いが感ぜられる。選択された記事は『玉石志林』として刊行。これらの記事がすでにあって編集出版に時間がかからなかったことを考慮しながら、時期不明だった『玉石志林』の刊行時期について『バタヒア新聞』（文久2年）より前、すなわち文久元年（1861）とすると、蕃書調所頭取の古賀の新聞刊行への戦略が明確になる。
洋書調所を去った後も続く古賀の「マガゼイン」への愛着は「度日閑言」に結実しており、「新文始原」の寸評は日本における新聞起業による共有知の公開と啓蒙力への期待が表出されている。

## 3　謹一郎の上書や提案

・天文台に蛮書和解御用を設置[30]
寛政から文化年間の異国船来航事案が多くなるなか、長崎奉行通司の信頼性が揺らぐ誤訳事件が起こり、大槻玄沢は幕府直轄の蘭書翻訳機関を提言した。
文化8年、天文台に蛮書和解御用が暦作測量御用、地図御用に加わり、大槻玄沢を任命。

・嘉永6年ペリー来航後、阿部正弘諮問以降の流れ
嘉永6（1853）年6月15日幕府、儒役林健・西丸留守居筒井政憲・同林煙・儒者佐藤捨蔵・同古賀謹一郎・同安積祐助・儒者見習林晃・天文方手付杉田成卿・同箕作阮甫等に米国国書の翻訳を命ず（維新史料綱要）。返書草案作成にも謹一郎は携わる。
それまでのように和蘭文書における長崎奉行対応ではなく、幕府直轄で最初の外交機密文書作成担当グループの設置を意味する。天文方手付の2者は蛮書和解御用。

⇒外交機密情報の幕府直轄取り扱い開始。

・嘉永6年7月、老中阿部正弘の諮問に応じて勝麟太郎（海舟）が提出した6月の江戸湾防御用台場建設に続き、二度目の上書は教育研究機関設置を主眼として、「教練学校」と付属の兵書翻訳書出版、御文庫へ蘭書を集約し兵学等研究が必要とした。

### （1）存念書（嘉永6（1853）年8月13日提出）[31]

・植民地化する世界を俯瞰し、東アジアの最新情勢について開陳

---

[30] 松方冬子編『日蘭関係史をよみとく上巻』（臨川書店、2015）所収、上野晶子「江戸幕府の編纂事業における「厚生新編」と蘭学の「公学」化」p261以下。
[31] https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/idata/T16/II_222ni_/145-A/13/1740.tif,
東京大学史料編纂所所蔵「遏蛮彙議 巻11」（コマ始３４８－終３７９）「遏蛮彙議」（てきばんいぎ）は徳川斉昭旧蔵で、阿部正弘の諮問に対する上書集。（眞壁、2007年、p386以下）参照。

特にシャムが航海貿易を開始しロンドンへ三隻の商船を派遣した。シンガポールではそれ以前から年々40隻ずつ往来している。

・異国船打ち払いの政策転換をせまる
　キリスト教布教のような迂遠な方法ではなく、いきなり武力威嚇で迫る相手国に対する当今の急務は水戦航海の術を鍛錬して我武威を張り、威賊に打ち勝つことが肝要。キリスト教吟味だけではすまない状況がある。

・ペリーへの返書の方法（略）
・実地検分を伴う兵学や武備技術の移入方法
　バタフィア、シンガポールへ使節を派遣し、現地の技能職人を雇用、武器等の購入、使節の家来には周辺諸国の巡見によって動静探索させ、砲台や城柵を実地検査させる。現地買い入れの船でオランダ人の案内で帰国させる。雇用職人を沿海諸国に送り、日本人職人を指導養成する。「船廠砲局」を設置する。諸大名は解禁に備えて、武備整備のため制度改革を行う。

・出貿易のための諸外国への通信使節や留学生を派遣。
　領事官派遣により貿易拠点となる商館を各国に置いて、全世界の「耳目の官」によって情報収集分析すべきである。また留学生を派遣し諸技術を英仏などで学ばせる。
～安政2年6月にも領事館制度について重ねて上書。
・対外貿易策の提案など。

　⇒勝麟太郎（海舟）の上書は諮問に対して短期中期的な政策を明解に提示した。対して古賀の上書は長い力作で、政策論としてみると当面の対処と中長期的の問題解決の手順が必ずしも明解ではない。しかし、多面的な情報収集をもとにした、国際情勢分析はすぐれたものがあった。また、外国からの攻めを受動的に守衛するだけでなく、日本から海外に進出し交易を図るうえで、世界に「耳目の官」すなわち領事を置いて情報分析をさせるという斬新な提案も含んでいた。「耳目」は後年の「度日閑言」中「新文始原」付言「飛耳」の熟語「飛耳長目」に通ずる言葉。座して情報の到来を待つのではなく広く世界からの情報収集分析力をもつことが富国の道という国家戦略を提言したものといえる。

## （2）洋学所（蕃書調所）に関する提案

・洋学所設立までの流れ[32]
安政元年（1854）5月、老中阿部正弘による幕政改革37ケ条のうち、外交専門の「海防局」設置（第27条）で、海防局内付属の一局を設けて外国事情に通じている儒者蘭学者兵学者砲術家などを出役させ月に12度くらい議論の場を通じて情勢分析をさせる。陪臣への機密事項漏れなきよう注意するが、衆知を集めるようにする。
これに対する6月初めの勘定奉行の答申「海防建議」では、長崎奉行通詞に外交機密事項を扱わせている点に懸念を表わし、機密の重要性を認識できる海防掛付属機関で平時の諸事研究により蘭学の翻訳書も多くできるようにしたいとする。

[32] （原、2001年、p31以下）（眞壁、2007年、p425以下）を参照。

⇒幕閣では軍学書の翻訳研究、海防のため機密情報の分析専門機関設置の政策実現の流れができていた。

・安政元年8月、古賀の「洋学建学」が林大学頭復斎によって受理される。現状では存在が確認されていないため内容が不明。学問所儒者だが「洋学」重視をさらに公に表明。
・安政2年8月30日、古賀謹一郎が洋学所頭取に命ぜられる。立会として筒井政憲、川路聖謨、岩瀬忠震、水野忠徳を任命。意思決定過程は古賀が立会に伺をあげ承認を経て老中の裁可を受ける。

①「洋学所之儀ニ付奉伺候ケ条」
安政2年9月、箕作阮甫の協力を得ながら頭取として「洋学所之儀ニ付奉伺候ケ条」[33]12箇条を提出。立会による意見をもとに改訂案8箇条を作成し、11月老中阿部正弘に提出。
　新役所取り立ての御主意として「畢竟海内万民之為メ有益之芸事御開之訳」とし、兵学だけでなく実用諸芸による殖産興業をめざす理念を明示した。
　設置場所に始まり、会訳所（翻訳機関）・稽古所（教育機関）・実験所（研究機関）等の間取りを今後設定、各所に分散所蔵される洋書の集中管理、技術教育用の実験装置（武器製造や分析）などを備えること、国禁のキリスト教以外外国書籍訳書、絵図面類、日用之器械兵器類を検閲の上、出版普及を図るようにすること（洋書翻訳書の天文台改めを調所で行うようにすることも提案）、有用技術の啓発のための教育に、幕臣以外からも身分に捕らわれない門戸開放（陪臣の入学許可の実現は、3年後の安政5年5月20日）を提案、教授以下の任用処遇案など。

・安政3年6月13日から、新な開板洋書及翻訳書は、総て蕃書調所の検閲を受けることとなる。また、6月26日、諸家所蔵の洋書は書目及刊行年次を上げさせ、すでに翻訳ができたものは各一部を提出させるようにした。この月、蕃書調所での洋書講究を許す（維新史料綱要）。

⇒頭取就任後、1年弱で翻訳出版の一元的管理と統制機能が蕃書調所に加わる。

情報統制機関の機能について考慮すれば、蕃書調所を大学機関の祖とする見方は一面的[34]との宮地正人氏の見解に沿いつつ、安政5年から文久3年まで蕃書調所が行った草稿検閲の記録史料「開版見改元帳二」（東京都立中央図書館特別文庫蔵）をみると、キリスト教表現については厳禁が貫かれている。また、文久2年4月にも開港後の外国書籍の流入にともない開板の出願については厳重にそれを除いたうえで出版許可を出すよう達せられている。禁教箇所の削除改訂を命ぜられた例として長州藩版の『英国志』（原典は『大英国志』）がある。ただし、この史料の全件数168件127部のうち、『英国志』のほか、訂正1部、不許可は2部にすぎず、大半は医学書、兵学書、語学書、理化学書として許可のうえ出版された[35]。

---

[33] 「古賀筑後守洋学所意見書」『江戸』1(2)(2),江戸旧事采訪会,1915-07.所収, NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1468429 (参照 2024-11-21)
[34]（宮地、1997年初出、デジタル版）
[35] 日本科学史学会 編『日本科学技術史大系』第1巻 (通史 第1),第一法規出版,1964. NDL/DC https://dl.ndl.go.jp/pid/1371050 (参照 2024-12-12)p61以下。森睦彦「蕃書調所の出版検閲」『法政史学』第17号、1965年3月、pp100－110。長州藩版として出願された「英国志」については、山口が前掲註2の科研・公開研究会「幕末維新期の藩版と官版を考える-その政策・印刷工房・頒布-」（2018年3月28日）において「『太政官日誌』長門聚珍版は何処に～尾佐竹猛と長州の版刻を追って」と題した報告のなかで紹介したことがある。

②蕃書調所の絵図調方の増員と画学局設置の伺
・蕃書調所設置後、当初から絵図調方出役に川上万之丞（冬崖）が任命された。

・文久元年（1861）5月、謹一郎から新発田（柴田）収蔵死去に伴う、絵図方増員の伺書を提出[36]。
「西洋芸術多端之内ニ而、画学之儀は差向必要之義ニ付、其後調所ニ於而稽古為仕罷在候処、追々来学之者も御座候ニ付」
勘定奉行の反対にあい難行。6月、画学局設置されるが、教授の名称は用いず、画学出役とし、筆頭は川上万之丞。
当初、勘定奉行は学問所でも唐絵（中国画）を扱ってはいないので、必要ないという反対意見。
大小目付からの次の賛成意見に、外国奉行も同意。

「（西洋画と唐画には大いなる違いがあって）本邦と唐と之画学は、気を主といたし、畢竟玩弄物にて、実用之品無御座、西洋画之議は、実用を主といたし候に付、彼国学校之一学科ニ相立、中々以端芸といたし候筋柄には無御座、凡測量図を始、悉く法則有之、其他写真之法は、物産学之階梯にも相成、又窮理之啓蒙とも相成、兵学の目的とも相成、造船学之原則とも相成、右法則を不心得ものハ、縦令彼方之写真を一覧いたし候とも、其意を用ひ候廉相分不申、右故、画学、窮理学は諸学之階梯と致し、幼年之もの初而学校に入、此両科を相学候由、承およひ候」
「国画と唐の画学は気（精神）を主とした玩弄物であり実用ではありません。西洋画は実用を主としており、外国では学校の一学科にあって、しかも周縁に位置している学科ではありません。およそ測量図をはじめすべて図画には法則があり、写真（写実）の方法は物産学の初歩、科学的な啓蒙、兵学の目的、造船学の原則にも通じており、この法則を理解しないものは写真（写実的図画）をみてもその法則を用いていることがわからないのです。そのため画学と物理学はすべての学問の入門段階に入れ、幼年のものも学校で学ぶようにしたほうがよいと考えるものであります」（現代語訳は山口）

⇒西洋画の写実的特質と実用性、専門学科との関連を含めて総合的な知見で的確に書かれており、古賀が素案を書いたものではないか。
その根拠として、古賀家文書[37]のなかで、亡父儒式葬送の方法手順を図示し遺そうとしていることや、「謹日誌」では「エルンストの画[38]」を描き写している（嘉永元年末から2年1月の条）ので、絵ごころがあったとわかること、「蕃談」編集時から挿絵にこだわりがあったこと、「マガゼイン」の翻訳分担を示す「月刊志林」で記事の挿画の有無の記入が厳密に記されていることなど。

⇒斬新な政策提言には海外への「耳目」の派遣といった積極的な領事制度による情報収集といった斬新なアイデアも含まれていた。対外情報の受動的な翻訳だけではなく、共有知として出版を奨励し啓蒙を図るという洋学所設立案の理念はそれまでの「知らしむべからず」という幕府の姿勢の転換を図ろうとしていた。そして啓蒙力をさらに推進するための洋画表現による視覚伝達力を重視し画学局を提案し設置された。

---

[36] 画学局設置伺及び次の大小目付の具申は、（原、2001年、pp.91-93）参照。
[37] 古賀精里・古賀侗庵葬儀并大塚墓地記録（東京大学史料編纂所蔵）79丁（絵図・記録・文書47点）
[38] 「エルンストの画」が何を示すのか不明。

## ４　蕃書調所の「新聞」発行

・2章3節でみたように、すでに『マガゼイン』の翻訳対象に新聞記事が入っており、イラストレイテッドロンドンニューズ翻訳記事を含む『玉石志林』が蕃書調所で刊行された。翻訳記事を編成した官板による新聞の発行へと、蕃書調所は進んでいく。

（1）蕃書調所での新聞発行認可に向けて[39]

安政元年（1854）

英国『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』がイギリス提督から長崎奉行に提供され新聞挿絵に魅了される様をオランダ・スンピン号艦長が書簡で本国に伝える。日本政府の対外情報入手経路が別段風説書だけではなくなったことをオランダ側も認識。

安政5（1858）

この年中に、古賀による「別段和蘭風説書」の蕃書調所での直接翻訳と上木願～これに対し長崎奉行の反対意見もあり外国奉行、大目付との間で消極論が出て協議。並行して別段風説書の存続に関する協議も続く。

＊この年の「月刊志林」の12月に「新聞」記事翻訳3件（手塚律蔵による）が初出。

安政6（1859）

3月6日（4月8日）、幕府は別段風説書の存続希望を表明。これに対して、4月18日（5月20）、オランダ国領事官ドンケル＝クルチウス書簡は毎年の別段風説書調整の不可能を告げ入手した諸新聞の重要記事抄録の機会あるごとの提出を表明。第1号を提出開始。7月31日付出島発第2号出される[40]。

安政7年・万延元年（1860）

10月、謹一郎と勝、新聞紙翻訳について蕃書調所で担当するにあたり、必要書籍（25部70冊3帙1枚）の購入を書物問屋万屋兵四郎を通じて行いたいとの伺いを提出。11月4日に許可される。[41]

12月、謹一郎と勝麟太郎、バタフィア新聞の間断について首尾がわかりかねると継続を願う伺。

12月27日、筆記方出役として吉田賢輔をおく。教授方が海外新聞を口訳したのを筆記方で書きとる職務

文久元年（1861）

＊バタフィア新聞の翻訳編集作業続く

文久2年（1862）

＊バタフィア新聞以外の翻訳対象に拡張。

2月26日、神奈川奉行所へ指令：中外新報が海外各国の変事を記載しており引き続き上木すべく、新聞紙同様連続して舶来を取り計らうべし。

（4月以降月日不明）松平春嶽から六合叢談、中外新報を毎月日本政府へ10部ずつ提出させるようとの指示（新聞紙事件、挟み込み紙片文書）。

---

[39]以下の参照史料は東京大学史料編纂所蔵「新聞紙事件」「開成調所伺集留・乾」「開成所伺」同所蔵、及び松方、2007、pp.290-294

[40] 松方、2007、pp288-289

[41] 「開成調所伺集留・乾」

5月22日、周防守（老中板倉勝静）より、外国奉行、神奈川奉行への指令：中外新報。六合叢談について海外各国の変事が記載されているので毎月上木の仰せつけがあったがこのところ、外国人持ちわたりなく、上木中断したので以降毎月10部ずつ提出せよ。
（月日欠）神奈川奉行へ指令：在留外国人が発行販売する新聞につき通詞自用のつもりで購入翻訳させ提出せよ。外国奉行にも通知。

⇒欧文外国新聞の輸入翻訳から中国語新聞を翻刻出版対象とする変更か。開港後の横浜居留地発行英字新聞の翻訳が開始。

（2）文久2年正月から刊行された新聞
いずれも木活字版、万屋兵四郎販売。販売用の袋（有郭三行）の中央題号の上に「官板」の角書。左下に「連月/発行」の朱印。各新聞には「官板」は記されていない。

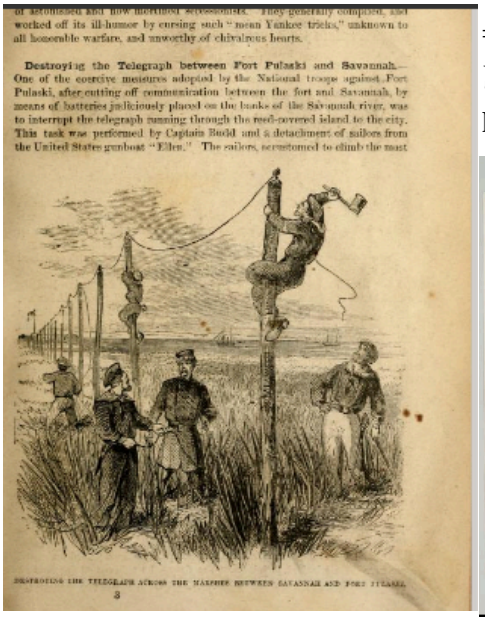
『バタヒア新聞』巻1～12（文久2年正月刊）
内題の年月（1861年8月31日/文久元年7月26日～1861年10月9日/文久元年9月6日）
最終記事発行から3か月で日本で受領翻訳印刷出版

『バタヒア新聞』巻13～23（文久2年2月刊）
内題の年月（1861年10月12日/文久元年9月9日～1861年11月16日/文久元年10月14日）
最終記事発行から3か月で日本で受領翻訳印刷出版
記事のリソースはバタフィア政庁機関誌『ジャワ新聞』（バタヒア新聞、週刊）から各国記事を翻訳。

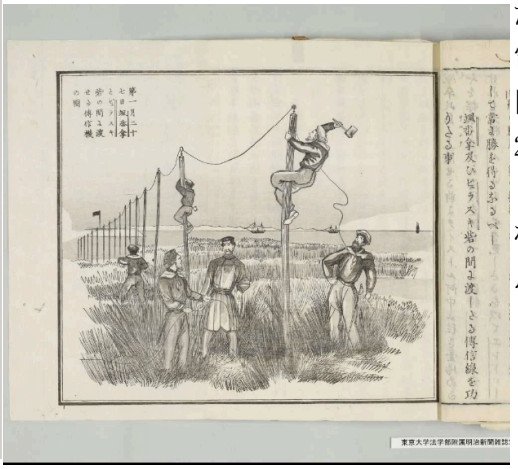
『海外新聞』巻1～4（内題文久2年8月印刷）
1862年1月1日文久元年12月2日～1862年1月11日文久元年12月12日
原紙の最終記事発行から8か月で日本で受領翻訳・印刷出版間隔（以下、間隔）
『海外新聞』巻5（内題文久2年刊・月欠）
1862年1月15日文久元年12月16日・間隔不明
『海外新聞』巻6（内題文久2年9月刊）
1862年1月18日文久元年12月19日・間隔は閏月入って10か月
『海外新聞』巻7（内題文久2年閏8月印刷）
1862年1月22日文久元年12月23日・間隔は閏月入って9か月
『海外新聞』巻8（内題文久2年9月印刷）
1862年1月25日文久元年12月11日・間隔は10か月
『海外新聞』巻9（内題文久2年9月印刷）
1862年1月29日文久元年12月30日・間隔は10か月
『海外新聞』巻10（内題文久2年9月印刷）間隔不明
⇒文久元年入手の原紙1種を翻訳し翌年8月から9月までに8か月から10か月かけて刊行。

『海外新聞別集』上巻（内題・柱刻文久2年閏8月刊、柱の閏は右肩に入木で入った可能性があるので、当初八月を予定か）
図版15枚うち1丁分折りこみ図は木版、墨板のほか薄茶濃淡で陰影感をつけている。
原本紐約新聞紙三百三十三号1862年4月5日文久2年3月7日

原本紐約新聞紙百零三号1862年5月24日文久2年4月26日




⇒挿図の解析調査からフランク・レズリー・イラストレイテッド・ニュースペーパー紙（Frank Leslie's Illustrated Newspaper、1855年創刊）の南北戦争報道記事を訳出したことが判明。



電信切断図は、同紙1862年1月27日号。5月24日号（103号ではなく345号）の図2点も翻刻挿入。

左がJanuary 27th, 1862. p33, Frank Leslie's Illustrated Newspaper （Internet archive.com内）
右が『海外新聞別集・上』東京大学明治新聞雑誌文庫蔵（東京大学デジタルアーカイブポータル内）

したがって、図版調整を入れた出版までの間隔は4か月。（ニューヨークからの舶載時間を考えると非常に早い編集がなされたと思われる。

January 27th, 1862. Frank Leslie's Illustrated Newspaper, 表紙の下部分、海外新聞別集・上:「第十島を火攻之図」:長文よりも図解を示すとする。（参照元は上の掲載図と同じ）

文久元年（1861）5月画学局設置伺を通じて勘定奉行から受けた拒否反応に対して、西洋画表現の視覚伝達力によって米国南北戦争の戦闘状況をリアルに示しその実用性を訴えたのが、文久2年『海外新聞別集・上巻』である。
翻刻された挿絵は画学出役筆頭の川上万之丞（冬崖）らの実力を示している。戦闘場面での動き、特に夜戦の情景は秀逸。折りこみ図によって絵入新聞のもつ大きさや迫力も伝えようとした。

『海外新聞別集』中巻（内題・柱刻文久2年9月刊、別刷袋は8月刻とある）

冒頭に半丁分で「荷蘭国及び普魯士国略図」
竹内下野守率いる文久遣欧使節のオランダにおける歓待報道記事を主としている。
⇒原紙のロッテルダム新聞の号ナンバーが現物デジタル版と一致しないため調査中。

『海外新聞別集』下巻（内題文久2年10月刊）
原本紐約新聞紙百零三号1862年5月24日文久2年4月26日
18丁、最終19丁オに「日本国使節針路略図」

・古賀は書物問屋仲間に対して市中売りにつき急遽指示し、新聞販売の活路をつけようとした（市中取締続類集）。

・文久2年5月　古賀は洋書調所から留守居番、学問所用係兼務となって転任を命ぜられた。

⇒古賀は情報一元化を別段和蘭風説書の蕃書調所翻訳と出版によって図ったが、その途絶により、結果として、新聞翻訳刊行へとの方針転換を引き出すことに成功した。かつての「月刊志林」の「月刊」に近い翻訳新聞の刊行は『バタヒア新聞』『海外新聞』で達成された。在任中に、英文絵入新聞「フランクレズリー・イラストレイテッド・ニュースペーパー』翻訳に着手させ、視覚的な南北戦争情報を盛り込んだ『海外新聞別集』を頭取として手にすることはなかった。

## 5　まとめ

この報告では、古賀謹一郎について「新聞」という切り口でその読書や情報環境を分析したのち、上書の出発点にある「存念書」と洋学所に関する提言について、世界的な視野に基づく情報収集分析に裏打ちされたものであり、文字情報だけではなく視覚情報を重視していた姿勢が、蕃書調所の設置後の絵図調方増員と画学局設置伺、そして洋画表現による視覚情報を取り入れた新聞発行にも生かされていったことを確認した。

・没後140年となる古賀謹一郎には、従来のように蕃書調所をもって東京大学機関の基礎を作ったという見方に加え、新たな称号が考えられる。それは、存念書や洋学所に関する伺などにみられるように、対外情報の積極的収集分析と一元的統制管理という大きな構想をもっていたインテリジェンス政策論者の祖というものである。

・一方、「マガゼイン」共同翻訳を通じた共有知の実践は蕃書調所会訳所に引き継がれ、『玉石志林』そして、官板翻訳新聞の公刊を実現させた。米国南北戦争情報を視覚的にも伝達する『海外新聞別集上巻』に至って、画学局設置の実効性を広く示そうとしたものと思われる。「万民の為、有益の芸事」を開くという古賀の理念が最もよく表されている。すでに攘夷論が吹き荒れていたなか、古賀は洋学の将来を危ぶんでいたというが、記事選択にその影響があったかを確認する作業は今後の課題としたい。『海外新聞別集上巻』に表された南北戦争の銃器の中古品が、その後幕府にむけられる銃口になろうとは誰も予想していなかったにちがいない。維新後、画学出役だった川上冬崖は陸軍で地図制作に携わり、画学局に学んだ高橋由一は西洋画の祖として、ともに視覚メディアの開発に携わっていく。

肖像に残る維新後の古賀の微笑は共有知の拡張とその行く末に向けられているようにみえる。

＊参考文献（本文中・脚注掲示以外）・データベース等

阿川修三,『海国図志』と日本 その2：和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について, 文教大学『言語と文化』第24号, 2012年3月
石山洋「「玉石志林」の成立とその原典」『蘭学資料研究会研究報告』(78),蘭学資料研究会,1961-02. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/11395170 (参照 2024-10-25)
小野秀雄,「遐邇貫珍について」,『新聞研究』13巻27号,1951年, pp.6-7
小野秀雄,「翻刻新聞雑誌の原書について」,『新聞学評論』N0.1, 1952年, pp.52-73
尾佐竹猛,「幕末の新聞」『明治文化叢説』, 学芸社, 1934年
ゴンチャーロフ著、高野明、島田陽訳『ゴンチャローフ日本渡航記』講談社学術文庫、2008年
齋藤毅,「新聞名辞考」『参考書誌研究』6号, 1972年10月, pp.1－19
蘇精辑, 林則徐看見的世界:《澳门新闻纸》的原文与訳文, 広西師範大学出版社, 2017年10月
卓南生,『中国近代新聞成立史』: 1815-1874, ぺりかん社,1990年12月
卓南生,『東アジアジャーナリズム論』,彩流社, 2010年2月
沈国威編著,『「六合叢談」(1857-58)の学際的研究』, 白帝社,1999年11月
『幕末明治新聞全集』第2巻及び第3巻、世界文庫、1961年、1966年
松浦章,「『遐邇貫珍』と幕末に伝えられた太平天国情報」『或問』 67, N0.9, 2005年,pp.67-77
松浦章, 内田慶市, 沈国威編著,『 遐邇貫珍の研究』, 関西大学出版部, 2004年1月
宮地正人,「幕末・明治前期における歴史認識の構造」『歴史認識　日本歴史思想体系』, 岩波書店, 1999年
宮地正人編,『幕末維新風雲通信―蘭医坪井信良家兄宛書翰集』, 東京大学出版会, 1978年
洋学史学会監修『洋学史研究事典』思文閣出版、2021年
Masini, Federico, The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its evolution Toward a National Language: The period from 1840 to 1898, Jouornal of Chinese Linguistics Monograph Series No.6,Chinese University Press,　https://www. jstor.org/stable/23887926

宮内庁書陵部所蔵目録・画像公開システム　https://shoryobu.kunaicho.go.jp/
国文学研究資料館・国書データベース　https://kokusho.nijl.ac.jp/
国立公文書館デジタルライブラリ　https://www.archives.go.jp/
NDL・DC　https://dl.ndl.go.jp/
国立国会図書館次世代デジタルライブラリ　https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/
東京大学史料編纂所SHIPs https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/
東京大学デジタルアーカイブポータル（明治新聞雑誌文庫新聞資料を含む）
https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/
東京都立図書館デジタルアーカイブ　https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top
早稲田大学図書館古典籍総合データベース　https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/
DBNL　https://www.dbnl.org/　オランダ文学のデジタルライブラリ
Delpher https://www.delpher.nl/
HathiTrust https://www.hathitrust.org/
Internet Archive　https://archive.org/

＜古賀謹一郎略年譜・未定稿＞[42]

太字は古賀増（謹一郎）から幕府への上書や伺を示す。

〇文化13（1816）年
江戸に古賀侗庵と鈴木松の間に生まれる。
〇弘化4（1847）年
父の死去のあと、学問所儒官となる。
〇嘉永元（1848）年
2月14日、漂流帰還者次郎吉の話を聞く「漂談会」を主催（謹日誌）。
3月29日、『マガゼイン』の翻訳を池田才八と相談する（謹日誌）。
〇嘉永2（1849）年
閏4月、学問所の諮問に応えて「海防策」を上げる。
憂天生（古賀謹一郎）編「蕃談」として彩色絵入で編集成立させる。
〇嘉永6年（1853）
　　6月、米国使節ペリー来航。7月、露国使節プチャーチンが長崎来航。
6月、幕府、儒役林健・西丸留守居筒井政憲・同林煒・儒者佐藤捨蔵・同古賀増（謹一郎）・同安積祐助（艮斎）・儒者見習林晃・天文方手付杉田成卿・同箕作阮甫等に米国国書の飜訳を命じた。
8月、老中阿部正弘が行った米国通商要求に対する諮問への上陳として「存念書」提出。
9月、米国書和解で褒賞銀30枚。露国交渉関係書簡につき、同僚安積艮斎とともに漢文和解、返書草案作成も担当。
10月、ロシア使節の江戸拝礼に関して国王使節は重臣を理由に許可の建議をした。
12月、筒井政憲（西丸留守居学問所御用）、川路聖謨（勘定奉行）、荒尾成允（目付）、古賀謹一郎が長崎でロシア鑑パルラダに、プチャーチンを訪問。
〇嘉永7年・安政元年（1854）
2月、露艦浦賀渡来の報により予め浦賀応接を、6月には、外国船渡来時には応接のため臨機派遣の命を受ける。
8月、洋学所設立に関する「洋学建白」が林大学頭に受理される。
10月、魯国応接のため下田に滞在。筒井、川路のほか松本十郎兵衛（目付）、村垣与三郎(勘定吟味役）、ほかに伊沢正義（下田奉行）。
＊このとき、下田交渉で滞在中にロシア使節の一員ゴスケヴィッチ保有の『遐邇貫珍』に接し（「西使続記」）クリミア戦争状況を知る。
11月、下田で伊豆沖の大地震の津波により被災して蔵書、著作など200巻余を失う。
〇安政2年（1855）
1月、洋学御用の命を筒井、川路、岩瀬とともに受ける。同時に小田又蔵（小普請）、勝麟太郎（小普請）も手付として任命（『日本教育資料　7』。
5月、米国測量艦隊の沿岸測量要求を国禁なので不許可、厳重取締とする幕府の方針に対して、異をとなえる上書を提出。伊能図は海中の深浅が不精確であるため、大船を保持しても航行に問題がある、測量技術の伝習も必要など指摘、条約締結後は世界情勢の情報提供を受けるのに、国内の事情を秘することはできないと主張。

[42] 項目採取について主として、[宮地、デジタル版]、[原、2001]、[眞壁,2007]を参照。一般事項は東京大学史料編纂所維新史料綱要データベースから得た。「小栗日記」は、群馬県史料集第7巻所収、1972年、群馬県文化事業振興会を参照。贈位については、田尻佐 編『贈位諸賢伝』上,近藤出版社,1975. NDL・DC https://dl.ndl.go.jp/pid/12253111 (参照 2024-12-03)。これにつきWikipedia内古賀謹一郎項目の引用から原典を確認した。
＊は山口で追加した本報告の初出を著す。

6月、領事館駐在についての上書：欧州の領事駐在制度を紹介し、交渉の主導権をとり互角の交渉にするため、単なる領事受け入れだけでなく、諸外国への駐在領事派遣を提案。将来的に貿易の利により「富強之根基」を立てることが大切等と説く。
8月、二丸留守居、洋学所頭取に補される。
9月、箕作阮甫の協力を得て、「洋学所之儀二付奉伺候ケ条」12箇条を提出。筒井、水野、岩瀬らの加筆訂正を経て、11月に改訂案を老中阿部正弘に提出。
11月、箕作阮甫（天文方出役）、森山栄之助（和蘭通詞）が翻訳御用となる。（日本教育資料7）
○安政3年（1856）
2月、洋学所、蕃書調所と改称する。
4月、蕃書調所の最初の人事において、箕作阮甫、杉田成卿の二教授（前任は天文方蛮書調所御用）、手伝として高畠五郎、松木弘安（寺島宗則）といった謹一郎門人らが入る。
6月、新たに開板する洋書及翻訳書に対して蕃書調所の検閲義務を課す。また、諸家所蔵の洋書は書目及刊行年次を上げさせ、すでに翻訳ができたものは各一部を提出させるようにした
○安政4年（1857）
5月、下田で日米追加条約締結。
6月阿部正弘死去、10月堀田政睦が老中首座となる。第2次アヘン戦争の結果天津条約締結。
6月、蕃書調所教授手伝の市川斎宮（広島人）に活字本開板着手を命ずる。
8月日蘭追加条約調印、9月日露追加条約。
9月、蕃書調所創設につき、謹一郎が賞せられる。のち安政5年12月、万延元年12月も同様に賞を受ける。
10月、米国領事ハリスが江戸宿所として蕃書調所に入る。以降、条約締結までの折衝の場となり、その間、和学所が蕃書調所の修業機能を担う。
11月、川本幸民（薩摩藩士）蕃書調所出役教授職並となる。
○安政5年（1858）
3月、謹一郎、箱館在留米人の提出に係る洋書を購入すべきと箱館奉行堀利熙に通牒。
4月、井伊直弼が大老となる。6月、開港勅許なき日米通商条約締結。7月、家茂14代将軍に。以降、安政の大獄実施され、外交系幕閣が次々と逼塞となる。
5月、陪臣の蕃書調所への入学について許可される。
6月、日米修好通商条約締結。翌月から9月にかけてオランダ、ロシア、英国、フランスと各々修好通商条約締結。
7月、海防掛を廃して外国奉行設置。外交の専門機関となり、学問所儒者の外交関与はなくなる。
夏以降、和蘭風説書途絶。謹一郎は風説書の蕃書調所で翻訳と出版の伺を提出。
○安政6年（1859）
1月、幕府軍艦咸臨丸、米国渡航のため、品川を出発。軍艦奉行木村喜毅・軍艦操練所教授方頭取勝麟太郎ほか。5月帰朝。6月、勝が蕃書調所頭取助となる。
12月、英語に堪能なオランダ通詞堀達之助を出獄させ、翻訳方とする。以降、英日辞書編纂に携わる。
○安政7年・万延元年（1860）
12月、吉田賢輔、蕃書調所筆記方出仕、取締兼任。
○文久元年（1861）
蕃書調所、『玉石志林』刊行か。
文久2年（1862）
3月23日、幕府、英・蘭両国公使に牒して、商船建順丸の香港及バタフィア渡航に関し、同地総督の周旋を求める。
5月、蕃書調所が洋学調所と改称。一ツ橋門外護持院原に移転。
5月15日、謹一郎、留守居番、学問所用係兼務となって転任、8年にわたる任を終える。
6月18日、洋書調所教授方出役津田真一郎、西周助らにオランダ留学を命ずる。
7月4日、勝、軍艦操練所頭取となる。

この年のうち、『バタヒア新聞』『海外新聞』『海外新聞別集』、中国語新聞『中外新報』『六合叢談』翻刻刊行。
〇文久3年（1863）
　　8月、洋学調所が開成所と改名。
〇元治元年（1864）
4月、＊次女、四女、五女と三人の娘を一度に失う。種痘の副作用が原因か（大塚儒者墓所の墓碑による）。
8月、大坂町奉行に任ぜられるも、病気を理由に辞退。
〇慶応2年（1866）
12月、製鉄所奉行並を命ぜられる。
〇慶応3年（1867）
＊1，2月、小栗と会う（「小栗日記）。
3月、目付となり、筑後守と称する。江華島を巡るフランスと李氏朝鮮の紛争に、座礁した米国商船の焼き討ちと乗組員殺害事件がからむ問題をめぐって和解調停のため、朝鮮使節の派遣副使として対馬出張を命ぜられるも、幕府瓦解のため実行されなかった。
〇慶応4年・明治元年（1868）
　　鳥羽伏見の戦のち戊辰戦争
＊1，2月　小栗忠順と頻繁に会う（『小栗日記』）。
1月28日、目付古賀増「筑後守」を罷む。
　　2月、幕閣への書写回覧「中外新聞」（開成所柳河春三主宰）が木活字による『中外新聞』として発行開始。京都では『太政官日誌』発刊。
　　『中外新聞』に続き、江戸で木版新聞の活況がうまれる。
4月、長女死去。次女が女婿・古賀鋭の後妻となる。
　　5月、江戸城内「江城日誌局」から新政府による『江城日誌』発行。
　　6月、鎮台府により江戸の新聞無許可発行禁止となる。『関東鎮台日誌』『鎮将府日誌』『東京城日誌』と、東京への太政官移転まで改題しながら官版日誌の発行続く。
　　6月、昌平坂学問所を鎮台府が接収。
「席日閑言」、この年前半に成立か。
10月、徳川家の転封とともに静岡に移住。
〇明治2年（1869）
　　2月8日、政府が初めて新聞刊行を公許し、昌平学校を検閲機関とする。
〇明治3年（1870）
3月と5月に新政府から大博士として招聘されるも辞退する。
〇明治5年（1872）
＊古賀鋭より東京府あて私有地内の墓所継続使用許可願を提出し許される。（「古賀精里・古賀侗庵葬儀并大塚墓地記録」（東京大学史料編纂所請求番号2021-17）
〇明治6年（1873）
このころまでに東京、向柳原二丁目に住まう。
〇明治12年（1879）
母死去。東京学士院会員に首選で推挙され三か月にわたる説得にも応ぜず固辞。
〇明治17年（1884）
10月31日、死去。享年69。大塚先儒墓所に埋葬される。
〇明治22年（1889）
遺族より蔵書15,000点余が宮内省に献納される。「古賀本」として現・宮内庁書陵部蔵。
〇昭和3年（1928）
11月、正五位を贈位。

以上